

日本における初期の 中国金石学・木簡古文書学と『西域考古図譜』

片山 章雄*

はじめに

日本における東洋史の研究史に関わる、中国古代中世の多数の一次史料の利用については、多様な捉え方があると考えられる。遣唐使以降の日中交流史の結果としてもたらされた中国史料もあれば、清末以来確認された殷墟甲骨文字史料をはじめ、晋唐から宋に至る時期の新疆（西域）出土の漢文・非漢文の經典・文書・木簡、敦煌発見の胡漢諸文献もあって、特に発見によるものは、その情報の到着からさらに内容の把握、そして研究への利用という諸段階もあった。その手前の時代においても、旧知新知の個人墓碑や公私の諸碑とそれらに依拠した拓本や法帖、発掘された墓誌等の金石学方面の諸史料の把握や、その利用も忘れるわけにはいかない。

新疆地域を中心とする多種多様な史料の相当数を、現地踏査によって直接入手し持ち帰ったのは、1902年から1914年にかけて活動した、西本願寺の大谷光瑞（1850～1903）⁽¹⁾の長男たる大谷光瑞（1876～1948）の主導による、一般に言う大谷探検隊であった。第1回の探検は、知られているように英国ロンドンから大谷光瑞と随員四名が出発し、ロシア帝国領を経由し、パミールを越えて清国新疆に入った。そこで隊は分かれた、大谷光瑞・井上弘円（1872～1939）・本多恵隆（1876～1944）は英領インドに赴き、諸地域で後の合流隊員とともに活動し、1903年3月以降、相次いで帰国した大谷光瑞一行と他の諸隊員があり、また新疆調査から甘粛を経て

西安に至った渡辺哲信（1874～1957）・堀賢雄（1880～1949）一行のうち、渡辺は1904年5月に収集品を携え帰国した。この時から、上に記した研究史上重要な史料群のひとつへの、日本での研究が開始されることとなった。続く第2回と第3回の収集品も含め、それらの主要なものは、香川黙識（1853～1919）編『西域考古図譜』2巻（国華社、1915年）⁽²⁾に掲載され、隊員日誌等は後に上原芳太郎（1870～1945）編『新西域記』2巻（有光社、1937年）⁽³⁾にほぼ収録された。

1 金石史料を視野に含めていた大谷光瑞と 周辺の人士

大谷光瑞の探検踏査の目的のひとつは、『西域考古図譜』上巻の「序」によれば、仏教遺物の収集による研究の進展にあり、第1回の探検において収集した史料は、すでに前記の多種に互っている。また、3回の探検とは別に、大谷光瑞は上原他に命じて1904年11月に北京郊外の房山の石経を調査・採拓させ、自身も1906年9月から翌年、従者とともに中国に旅行して西安（長安近辺）で諸碑を発掘・採拓している。上記の『新西域記』上巻には、上原「石経山紀行」と、渡辺哲乗（1877～1930）「長安発碑記」、随員「唐の諸陵墓を探索」、さらに大谷光瑞述「善導大師の遺跡に就いて」が収録され、前後2度に互る史料調査、発掘・採拓の状況と成果を伝えている⁽⁴⁾。後者の旅行では、別途入手の拓本類も含め

(1) 以後、関係者の時代・年齢と人間関係を想定しやすくするため、括弧内で生没を「年」字を略して西暦で示す。諸種の一般人物事典や人事録に依拠しているが、西本願寺関係の職員録等も利用して提示した人物事典を含む片山編『予曾く英國倫敦に在り』（大谷記念館、2004年）で指摘済みのものもある。

(2) 復刻版（柏林社書店、1972年）があり、デジタル版は <http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/I-1-E-18/V-1/> <http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/I-1-E-18/V-2/> の他に、国立国会図書館内あるいは図書館送信参加館利用の限定として下記がある。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2591923?tocOpened=1>

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2591924?tocOpened=1>

(3) 復刻版（井草出版、1984年）があり、国立国会図書館内あるいは図書館送信参加館利用の限定として下記がある。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2586883>

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2586884>

(4) 『新西域記』上巻の掲載順に示すと、上原「石経山紀行」149～169頁、大谷光瑞述「善導大師の遺跡に就いて」171～174頁、渡辺哲乗「長安発碑記」174～176頁、随員「唐の諸陵墓を探索」

運んだのは、渡辺哲信の弟の哲乗だった。一行の帰国は1907年5月4日、哲乗も同月下旬で、この時の拓本群は、当時の摂津武庫郡本山村岡本（現神戸市東灘区岡本）の大谷光瑞別邸である二楽荘の「支那室」に、翌年には一部（昭陵六駿の什伐赤）が飾られていた。1910年の同室の写真から著名なものを含む17点の碑拓が見え、そのうち8点は碑を同定できた⁽⁵⁾。碑拓の半ばは北朝隋唐時代と確認され、仏教者・仏教史に限定されるというわけではなく、中国史の他に周辺交流史に関わる史料もあり、楷書のものが多いという傾向があった。

二楽荘での一部拓本の陳列が確認された1908年、第2回の探検が開始されていて、モンゴルのカラ・バルガスン、続いてホシヨ・ツァイダムにおけるウイグル・突厥の諸碑の調査時に、野村栄三郎（1880～1936）は石摺従事を明記するとともに、諸碑の文字判読につながるスケッチを残しており⁽⁶⁾、橘瑞超（1890～1968）の記録にも同様の石摺の記載があって初日25枚と伝える⁽⁷⁾。両者の2日目の記載は20枚・21枚で、各々の枚数か両者での枚数の記載上の不一致かは判然としないが、いずれとしても45枚以上の採拓があった。そしてそれらの拓本類は、両者が採拓の地を離れて西進し、野村日記の後段9月13日の記載によれば、ウリヤスタイの地から京都の大谷光瑞に宛てて送られた報告書・荷物中に含まれていたことが推測される。同年12月6日の史学研究会総会は西本願寺において開催され、大谷光瑞自身が「東洋史の研究に就きて」と題して講演した。その内容は、仏教色がない史料論で、そこでウイグル碑文の拓本に依拠したらしい暗示もあ

る。実際に当日の会に出席した内藤湖南（1866～1934）は、「蒙古より突厥回鶻の碑文送来目下借覧中」と稲葉岩吉（1876～1940）に書き送り、また大谷光瑞について「とにかくその精博は時として専門家の星を摩し」とも評している⁽⁸⁾。この時の講演の大意は羽田亨（1882～1955）の筆記で公開され、同時に大谷光瑞所蔵の古文書・古書、インド・新疆の収集品、中国の「金石拓本 数百種」等が展覧されたと記録される⁽⁹⁾。

ここで問題としたいのは、大谷光瑞における、西本願寺伝来の仏教ないしは日本の珍品至宝のみならず、第1回の探検で入手した、新疆等の歴史史料にもつながる紙の経典・古文書、さらに若干の木簡まで含めても良い⁽¹⁰⁾と思うが、それらに止まらず、2度目の中国旅行以後に確認される中国の金石拓本類、これらへの造詣の深さである。この北朝隋唐を中心とする金石史料をも視野に入れる姿勢は、仏教史や中国史の関係者からの影響と考えるには、なお材料が不足している。

例えば、10歳年長の先の内藤湖南は、歴史関係を中心として紙本・金石両史料に対する蓄積を相当に増していただろうが、光瑞・湖南間で前記のような貸借、そして湖南からの先述の論評があったことから、それ以前において、光瑞が湖南から史料上の影響を受けたとは考えにくい。また、湖南と同年の中村不折（1866～1943）も人脈豊かで、後には紙本・金石双方の収集と書の作品発表・研究において、他の追従を許さない地位を築いたとすることは、『禹域出土墨宝書法源流考』3冊⁽¹¹⁾や書道博物館⁽¹²⁾を想起すれば了解されよう。しかし中村は元々は洋画

176～181頁。随員名義の一文は、福井瑞華の日記と後に本文で言及する野村栄三郎の報告書等に依拠し編集したものとされる。

(5)「書画、石摺等の荷物方」の帰国記事、無記名「渡辺哲乗氏」（『中外日報』1907年5月29日、2面）があり、その他の小記事と碑拓の配置については、片山「大谷光瑞の書・入手拓本と歐陽詢」（『東海史学』第53号、2019年）を参照されたい。拓本の同定結果を原碑の年代順（諸説あれば古い年を採る）に記すと、「高盛碑」「等慈寺碑」「昭仁寺碑」「九成宮醴泉銘」「道因法師碑」「集字聖教序碑」「大秦景教流行中国碑」「諸葛武侯祠堂碑」となる。

(6)『新西域記』下巻所収の野村「蒙古新疆旅行日記」467頁（8月27日記載）、465～468頁（スケッチ其一は突厥碑文、二・三・四はウイグル碑文）。

(7)橘瑞超『使命記 蒙古の部』（私家版、2001年）197頁。

(8)『内藤湖南全集』第14巻（筑摩書房、1976年）所収の稲葉宛同年12月11日書簡、457、456頁。

(9)『史学研究会講演集』第二冊（富山房、1909年）、講演筆記は127～140頁、「第一回總會」176～178頁参照。「新疆」の収集品の記載はここにはないが、前注の内藤書簡に拠った。なお、

『講演集』第二冊のデジタル版は下記。

<https://dlndl.go.jp/infondljp/pid/768324>

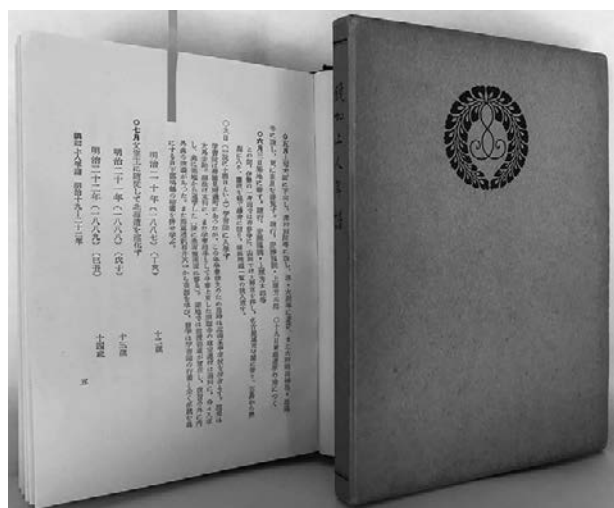
(10)第1回探検において、クチャ地域で文字木片、木簡状のものを数点入手している。渡辺日記（『新西域記』上巻所収の「西域旅行日記」）や後年出現した堀日記（『西域文化研究』第二・第四・第五〔法蔵館、1959～1962年〕に分載の「堀賢雄西域旅行日記」）の記載頁をまとめて示している『絲綢の道と探検の記録』（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1988年）102頁を参照。

(11)中村不折蔵并著『禹域出土墨宝書法源流考』3冊（西東書房、1927年）。デジタル版は次のとおり。
<https://dlndl.go.jp/infondljp/pid/1905012>
<https://dlndl.go.jp/infondljp/pid/1905015>
<https://dlndl.go.jp/infondljp/pid/1905019>

(12)1936年開館、2000年に台東区立書道博物館として開館。磯部彰編『台東区立書道博物館所蔵 中村不折旧蔵禹域墨書集成』3巻（文部科学省科学研究費特定領域研究〈東アジア出版文化の研究〉総括班、2005年）がある。

家で、日清戦争直後から書とその方面の史料収集に関心を深めつつも、第1回大谷探検隊終了時でも、なお本質的には画家だったと考えられる。ひとつの画期は、著名な『龍眠帖』の刊行だが、それは先に紹介した1908年の内藤湖南から稲葉岩吉宛書簡の、わずか2か月前だった。奇縁というべきか、湖南は書簡中の光瑞評のすぐ手前で、稲葉からの不折『龍眠帖』送付に謝すとともに、不折の書を厳しく論評し、さらに政治家ながら漢籍や書を能くする犬養毅(1855～1932)の論評が出るか出たかを話題にしている。

以上のように、大谷光瑞の中国金石拓本までも含めた史料把握の姿勢に関して、その背景や影響を与えた人脈を探ろうとしても、不明な点に行き当たるのである。そこで、大谷光瑞の幼少時からの、わずかながらの記録を振り返ってみる。詳細を極めている『鏡如上人年譜』にしても、1881年2月の数え年6歳時に「手習を初む」、翌年の数え7歳で「略書や孝経の素読」、「草書の手本をもつて、書法」の指導を受けた、というのが最初期の記載となる⁽¹³⁾。



『鏡如上人年譜』

その後1886年6月3日、東京築地に着いて遊学時代となり、9日あるいは14日に学習院に入学したという。この箇所には、さらに実質的にわずか1行、「習字は学習院の行書と全く系統を異にする日下部鳴鶴の楷書を併せ学ぶ」とある。数え11歳、満9歳の時である⁽¹⁴⁾。

ここに見える、直接の個人指導を授けたらしい日下部鳴鶴(1838～1922)こそは、後に中林梧竹(1827～1913)・巖谷一六(1834～1905)とともに、「明治の三筆」に数えられる高名な書家となる。その年齢・世代は、父の大谷光尊より12歳年長、翌年夏にその光尊が東京発で那須を経由し東北から北海道に赴いた時の同行側近の1人であった島地黙雷(1838～1911)とは同年、この旅行には光瑞も同伴となっていたが、このような世代差にあった日下部と大谷光瑞との関係は、私の知る限り、これまで一切扱われてこなかった。

ところで、大谷光瑞の東京遊学時代は上に記したように1886年、9歳の時に始まり、1890年10月に終わったが、おそらくその最初年から、日下部との関係が始まった。日下部は書法と史料に関して、1880年から1884年まで足かけ5年に互って、駐日公使随員として日本に滞在した金石学者・書家にして地理学でも名を残した同世代の楊守敬(1839～1915)と、松田雪柯(1823～1881)や巖谷とともに濃密な交流を持ったが、まさにその2年後である。日下部の表現では、楊は歴代の碑帖と書法に詳しく、来日に際して1万2・3千の拓本を持参したので、頻繁に会い借覧しては目録を作成したとのこと、『学書経歴談』その他に述べられている⁽¹⁵⁾。日下部からすると、西本願寺の新門たる9歳の大谷光瑞に楷書を直接指導するという大任の中で、1880年代前半に楊守敬から得た、碑帖や拓本への深い認識を

(13) 鏡如上人七回忌法要事務所編『鏡如上人年譜』(同事務所、1954年)、6歳・7歳箇所とも2頁。各々順に、満年齢4歳、水原慈音(1835～1908)の手本で駒沢格理(生没年未確認)の指導、満6歳直前、信楽哲乗(1843～1885)の指導、および水原の手本で田室友令(生没年未確認)の指導とのこと。

(14) 『鏡如上人年譜』5頁。

(15) 日下部東作『鳴鶴先生学書経歴談』(清水書店、1916年)10～11頁。同書にはデジタル版(<https://dlndl.go.jp/infondljp/pid/945064>)がある。また、井原雲涯『鳴鶴先生叢話』(興文社、1925年)9～10頁も参照。同書にもデジタル版(<https://dlndl.go.jp/infondljp/pid/1186356>)がある。なお、本文記載の中林は、1882年から2年間、

清国に渡って古碑を研究し拓本を収集していて、これに松田・巖谷・日下部を加えた4名が、1880年代に金石史料に依拠した書学を牽引したとも言える。神田喜一郎『日本書道史 11 明治・大正』(『書道全集』第25巻、平凡社、1967年)特に4～9頁、中西慶爾『日下部鳴鶴伝』(木耳社、1984年)の「楊守敬による開眼」35～40頁、「鳴鶴年譜」中の183頁、杉村邦彦「楊守敬と日下部鳴鶴—近代中日書法交流史の発端—」(『書学書道史研究』第4号、1994年)も参照。杉村論文は、『松田雪柯東都日記』も利用していて詳細かつ有益で、次のデジタル版もある。https://www.jstage.jst.go.jp/article/shogakushodoshi1991/1994/4/1994_4_29/_pdf/-char/ja

必ずや提示したことだろう。後に書でも名筆を残した大谷光瑞からすれば、1880年代後半の少年期に、日下部から書とその周辺の、おそらくは金石史料も学んで、師と仰ぐ関係が成立した。日下部は1891年に清国に一遊、金石書画に詳しい呉大澂（1835～1902）に会っては殷周秦漢の古器の銘を多数実見し、漢隸に詳しい楊見山（1819～1896）と交流したとも述べていて⁽¹⁶⁾、中国の書家にも、金石拓本にも、濃密に接した時期だった。

以上、大谷探検隊の史料入手の時期と、大谷光瑞が金石史料を視野に入れていた背景に関して、明瞭に影響を与えた人物や状況の記録は見出せなかった。しかし、東京遊学時期の少年光瑞の書の師となった日下部鳴鶴は、その2年前まで、当時すでに名を成していた松田・巖谷とともに、楊守敬に学んで金石史料への認識を深め、2年の後以降、それを大谷光瑞に伝授したと推測されるのである。

ここで、行論の関係上、書と中国に通じたもう1人の人物について扱っておこう。大谷光瑞の学習院入学の1886年6月には、同月19日付けで、正七位の嘉納治五郎（1860～1938）が教授兼教頭の辞令⁽¹⁷⁾を受けて着任となった。この時期の大谷光瑞と嘉納との関係は不詳だが、後に本願寺の学校である文学寮では講道館柔道を採用していて、1899年10月17日の柔道大会には新門光瑞と嘉納がともに臨席していた⁽¹⁸⁾。また嘉納は、数年前から中国清朝からの留学生受け入れにも尽力し、まさにこの年の同月、東京・神田に亦楽書院を開き、後に移転して弘文学院、宏文学院と改名、魯迅（1881～1936）が留学したことでも知られる。嘉納はさらに、大谷探検隊第1回探検に関連した複数の短報や、探検隊提供によるアショカ王石碑の写真を、自身が巻頭言を書く雑誌『国土』⁽¹⁹⁾に掲載している。柔道・教育のみならず書にも中国にも通じ、大谷探検隊とその史料をも視野に入れていた嘉納は、実は第1回探検隊のロンドン出発の当日、すなわち1902年8月16日

到北京にいて、前中日公使を訪問しているが、その人物が、後に発見され一部は流転した敦煌文書にも関わった李盛鐸（1859～1937）である⁽²⁰⁾。

大谷光瑞が少年時の東京遊学時期に知り、同時期に確実に師と仰いで関わった書家の日下部鳴鶴、13年後には確実に同席した書を能くした柔道家にして教育者嘉納治五郎、前者は金石史料にも詳しく、後者は探検情報にも関心を持ち、ともに清朝中国人と通じていた状況が確認された。この2人と、1914年に西本願寺門主を辞した大谷光瑞が、その5年後に名を連ねることがあった。

1919年7月15日に「書学院建設趣旨書」を作成した書家の比田井天来（1872～1939）は、1892年に上京し、良く知られるように日下部に師事した。唐代を最盛期と認め、「碑帖旧拓の精、墓誌新出の珍」、「金石文字の学」の継承を強調し、「書学院建設の急務を絶叫」しているその「趣旨書」の本文は、今もそのテキストを確認できる⁽²¹⁾。その末尾に並ぶ17人の墨筆署名も同じテキストで確認できるが、原本は別途画像提示されている⁽²²⁾。最初から8番目までを示すと、犬養毅（年長順10）、細川潤次郎（1834～1923、年長順3）、頭山満（1855～1944、年長順9）、大谷光瑞（年長順17）、樺山資紀（1837～1922、年長順5）、嘉納治五郎（年長順13）、日下部東作（年長順6）、松方正義（1835～1924、年長順4）、となる。実は年長順1と2は14番目と16番目の人物で、前記年月日以前の同年と前年に没しているため、この署名部分は前年までに成っていたはずである。各方面の名士にして相当程度書に通じた人士が並ぶ8番目までに、書学の頂点にいる日下部を含め、年長順3～6がある一方、年長順17最年少の大谷光瑞が入っているとも言えるが、日下部門下の比田井作成の趣旨書に、少年期の光瑞を知る師の日下部と嘉納が並んでいるとも言える。

以上、金石史料を視野に含めていた大谷光瑞には、日下部鳴鶴の影響の想定が可能で、探検隊情報

(16) 日下部上掲書、12～13頁、他。

(17) 以下のサイトに画像がある。http://gakushuin-ouyukai.jp/obog/judo_history.htm

(18) 無記名「本願寺文学寮柔道大会」（『国土』第14号、1899年）63～65頁。

(19) 無記名「大谷光瑞師の中央亞細亞探検」（『国土』第50号、1902年）

76～77頁、口絵「阿育王の円柱」（『国土』第56号、1903年）1枚、安藤正次「阿育王の円柱碑」（同誌同号）50～51頁。

(20) 老谷生「嘉納会長清国巡遊記（承前）」（『国土』第52号、1903年）32頁。

(21) http://www.shodo.co.jp/tenrai/tenrai/tenrai_a.html

(22) <http://www.shodo.co.jp/blog/hidai2017/2017/09/11/post-879/>

を扱った嘉納治五郎も含め、三者間には見えにくいながら接点があった。

2 大谷探検隊の主要収集品を載せた『西域考古図譜』の扉の隸書

大谷探検隊の収集品の主要なものは『西域考古図譜』2巻に収録され、1915年に刊行されたことはすでに記した。大谷光瑞が西本願寺門主を辞任した翌年のことで、それから100年以上を経てなお判明していないと考えられるのは、この巨冊の扉に見える隸書による20字の字姿に関する情報である。その画像と、紛れはまったくないが文字列を示すと、次の提示のとおりである。

大正四季五月印行

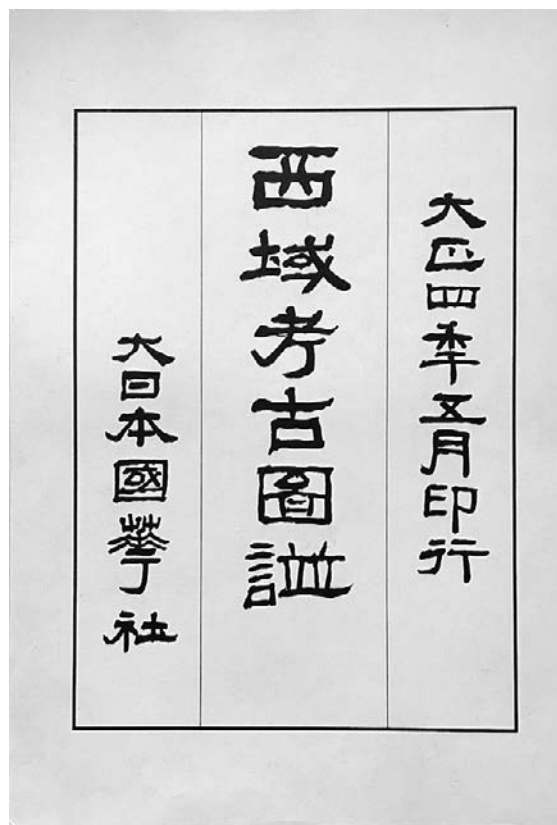
西域考古図譜

大日本國華社

(「華」の冠の「艸」は「艸」)

(「社」の傍の「土」は「土」)

問題は、この隸書20字は誰の筆によるものか、ということで、大谷光瑞に限定したこの時期の西本



『西域考古図譜』扉



『西域考古図譜』

願寺関係、大谷光瑞の1899年の清国巡遊関係、大谷探検隊関係の書物や題字等を長らく気にしてきた⁽²³⁾。同時に、隸書を能くする本願寺関係者の字姿、大谷光瑞と関係しそうな書家の字姿、等々を当てもなく眺めてきた。

上のような経緯を辿って、偶目した中国にも関係した岸田吟香(1833～1905)の碑、すなわち東京都墨田区堤通2丁目の隅田川神社にある「吟香岸田翁碑」の字姿をインターネットサイト上で見て、一部の文字の類似に気付いた。2020年4月に現地に赴き、駐車場入口に立つ碑を撮影して得た写真が、口絵1として提示したものである。

この碑は末行に「明治四十四年六月」とあり、その手前3行に「三島毅撰文」「日下部東作書丹」「楊守敬篆額」とあるから、字姿は1911年の日下部鳴鶴によるものと判明する。拓本と解説を付した冊子⁽²⁴⁾も刊行されているから、それも参照して関係

(23) 例えば、教学参議部(朝倉明宣)編『清国巡遊誌』(同刊、1900年)の原本の背にある隸書(重なる文字は旧字「國」)や廣田四郎『法主大谷光瑞上人伝』(国見館、1910年)の表紙・扉の隸書(重なる文字は「四」「大」、旧字「國見館發行」中の「國」「行」)。

(24) 石橋啓十郎編『隸書 鳴鶴岸田翁碑』(三多軒日本書道教育資料、1985年)、末尾に石橋犀水「隸書学習に於ける鳴鶴と天来」39～41頁、難波清郎「日下部鳴鶴の隸書について」42～44頁。

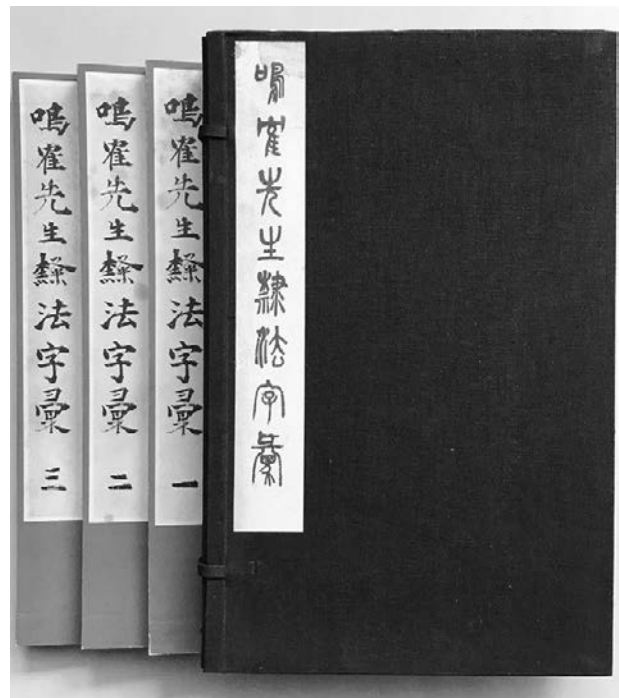
教育部字典/隸法字彙/吟香碑拓・写	字姿	扉字	／
大 / 大 大	大	大	1
正 / 正 正	正	正	2
四 / 四 四	四	四	3
率 / 率 率	率	率	4
五 / 五 五	五	五	5
月 / 月 月	月	月	6
印 / 印 印	印	印	7
行 / 行 行	行	行	8
西 / 西 西	西	西	9
域 / 域 域	域	域	10
考 / 考 考	考	考	11
古 / 古 古	古	古	12
圖 / 圖 圖	圖	圖	13
誼 / 誼 誼	誼	誼	14
大 / 大 大	大	大	15
日 / 日 日	日	日	16
本 / 本 本	本	本	17
國 / 國 國	國	國	18
*47604 華 / 華 華	華	華	19
**37488 社 / 社 社	社	社	20

扉隸書 20 字対照表

する文字を検証することができる。

問題の 20 字に番号を付し、まずは番号を右第 1 欄に縦に配し、右第 2 欄に既掲の『西域考古図譜』扉字のテキスト、右第 3 欄に既掲のその字姿を示す。残る第 4 欄は、右から、吟香岸田翁碑の「写＝撮影写真文字」「拓＝冊子掲載拓本文字」／吟香岸田翁碑を含まない「隸法字彙＝『鳴雀先生隸法字彙』3 冊⁽²⁵⁾掲載文字（2 字は合字過程提示の合字）」とし、テキスト提示困難な異体字の 2 字（第 2 欄で「*」「**」を付した 2 字）のみ、／中華民国の教育部異体字字典⁽²⁶⁾の番号・文字、という方式で第 2 欄の補足を含めて示すと、提示の表となる。

この表における、右第 3 欄の 1915 年『西域考古



『鳴雀先生隸法字彙』

図譜』扉の字姿と、第 4 欄の右 2 列の 1911 年日下部鳴鶴隸書の吟香岸田翁碑の字姿、その有無にかかわらずさらに左に置いた列の、吟香岸田翁碑を含めず採集した『鳴雀先生隸法字彙』掲載字姿、なければ合字で示した字姿、それらを比較すれば、『西域考古図譜』の扉の隸書は、日下部鳴鶴の筆になるものとしてまず誤らない、現在のところ、私はこう考えるのである。

門主を辞した翌年に出す探検隊収集品の大冊について、当時編纂関係者の間で、扉に配する文字をいづれかの活字フォントにするのか、楷書その他の墨書を得て版とするのか、書名・書物実態と出版のバランスでどんな模索検討がなされたか、今は探る材料すら持ち合わせない。大谷光瑞の「序」の末尾には「三月」とあり、既掲のように扉には「五月印行」、末尾には「五月二十五日印刷」「六月一日発行」とある⁽²⁷⁾。光瑞はこの年、『鏡如上人年譜』によると 2 月は在インド、3 月 6 日に乗船して 27 日香港入港、4 月 5 日香港発となっている⁽²⁸⁾。

(25) 比田井鴻編『鳴雀先生隸法字彙』3 冊（書学院後援会、1926 年）、順に 46、99、38、62、6、91、61 + 30、160、162、41、146、32、39、163 + 135、46、87、92、39、156、130 頁。なお、1～60 頁は第 1 冊、61～126 頁は第 2 冊、127～208 頁は第 3 冊にある。デジタル版は次のとおり。
<https://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/966590>
<https://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/966591>

<https://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/966592>
 (26) 以下のサイトから「序號」に従って辿り着くことができる。
https://dict.variants.moe.edu.tw/variants/rbt/variant_modified_record_files.rbt?pageId=2981982
 (27) 『西域考古図譜』上巻の「序」4 頁、同書下巻の奥付。
 (28) 『鏡如上人年譜』75～76 頁。

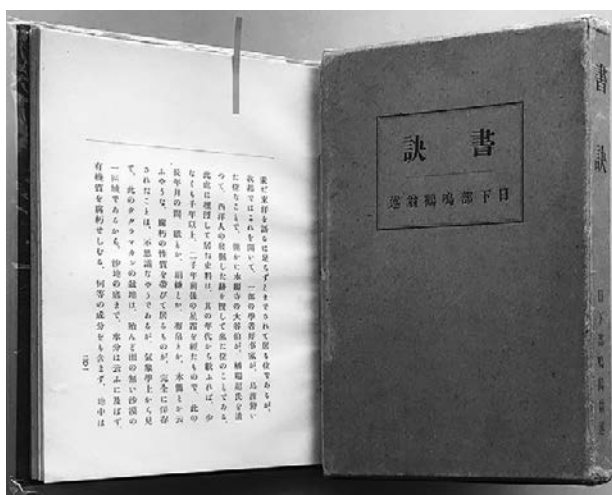
「序」の日付に従えば、その原稿はこのような滞在・移動の中で執筆され、東京の国華社への到着と相前後する関係かその周辺で、必ずや大谷光瑞の側から日下部鳴鶴に依頼されたのであろう。30年近い両者の関係の中で、かつての師たる日下部は扉の20字を引き受け、しかもその名が広く知られることなく刊行され、その後も研究利用されて今に至っている。『鳴鶴先生隸法字彙』3冊は、日下部の没後に弟子の比田井天来(鴻)が集字編集したもので、冒頭に1頁を割いて「引用碑版法書目録」「本書ニ引用セシ寄贈ニ係ル碑版及ビ法書目録」を入れ、前者末尾近くに「漢和大典題字」や「談書会集帖題簽」を挙げ、後者末尾には「以上ノ外書籍題字又ハ真跡ヨリ撮影シテ陰文トナシ碑版ノ体裁ニ擬セシ者数十字」とも記すが⁽²⁹⁾、もとより表に入れた合字2字が載せられていないのだから、弟子の編者にして知らなかったか手が回らなかったか、あるいは公表しない約束があったか、それらのいずれかであろう。

以上、『西域考古図譜』の扉の隸書20字を書いた人物は、大谷光瑞の少年時の書の師、日下部鳴鶴だったという解釈を示した。ここに師弟のみが解る背景を見るべきか、大谷光瑞は日下部の名を記したことがあったか、日下部鳴鶴は光瑞の名を

出したことがあったか、そのどちらもがなかっただろうと推測していたところ、指摘すべき1行に行き着いた。

問題の扉の書が出て2年半ほどが経って、池田常太郎(生没年未確認)編、日下部鳴鶴翁述『書訣』(文会堂書店発売、1917年)⁽³⁰⁾が出た。編者に答えた口述に依拠したもので、書法から書史、書鑑に区分された構成となっている。特に書史の漢代の隸書を扱った箇所では敦煌の発掘に触れ、中央アジア・新疆のタクラマカン砂漠の遺跡と楼蘭・ニヤの木簡に言及し、さらに「我邦では・・・僅かに本願寺の大谷伯が、橘瑞超氏を遣つて、西洋人の発掘した跡を捜して来た位のことである。」と述べ、その後にはスタイン(1862～1943)の探検とシャヴァンヌ(1865～1918)の漢語文書等の研究、羅振玉(1866～1940)の『流沙墜簡』を紹介し、木簡類を12に区分して例示している⁽³¹⁾。最後の文書・木簡の研究成果2点は、それぞれ1913年と1914年の刊行だから、かつて1880年代前半に1万点以上の碑拓を自身の書学史料に加え、その後の斯界を牽引してきたこの大家は、30年を経て、出版公開されたばかりの新史料の多数を把握し、先の『学書経歴談』刊行の翌年には、新出の木簡古文書も含めて口述していたことになる。

以上、『書訣』における記載を含めても、日下部鳴鶴が『西域考古図譜』の扉の隸書を書き、当然ながら刊行された時点でその大冊を所持したと考え、前々年、前年に出ていたシャヴァンヌ・羅振玉の両著も所持して、『書訣』に見える口述を残した、と自然に考えられるのである。隸書も書家によって字姿は異なるから、もし扉の20字が日下部ではなく、しかも日下部と極めて近い字姿の別人によるものならば、日下部は『西域考古図譜』刊行後にその扉の字姿を見て驚き、不審に思ったことだろう。そうではなく、『書訣』において大谷光瑞と橘瑞超の名、シャヴァンヌ・羅振玉の名を挙げ、一方、扉に関与した『西



『書訣』

(29)『鳴鶴先生隸法字彙』第一冊、頁付けはなく表紙に続く冒頭から数えて7頁目。

(30)デジタル版 (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/957388>) もある。

(31)順に『書訣』の194、197～200、201(引用部分)、202～207頁。203頁では、シャヴァンヌの書を「ドキュメン・シノア」と明

記している。その著者名・書名、デジタル版は次のとおり。
Chavannes, Édouard, Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkestan Oriental, Oxford, 1913.
<http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/VIII-5-B3-k-1/V-1/>

域考古図譜』という書名にはあえて言及せず、シャヴァンヌ・羅振玉の2つの書名は挙げる、これがかつての師にして当時の書家中の第一人者の姿勢だったと解しておく。

なお、1907年に結成された談書会は発起人30名、当初の幹事8名中に日下部があり、また中村不折も含まれており、幹事外には犬養毅や大谷光瑞が兄事する徳富蘇峰（1863～1957）、中林梧竹・比田井天来、西本願寺に関与が深い大口鯛二（1864～1920）の名が見える⁽³²⁾。この会では翌年から『談書会誌』を刊行し、後に前述の『談書会集帖』となった。当初の誌名として付された題簽の隸書は、日下部の書か否かは判断を控えておくが、後継誌名の題簽には「鳴鶴」とあるから日下部の書である。1918年11月の『談書会誌』第59号には、「高昌国人墓表真蹟 大谷家蔵」として旅順博物館への依託品の写真があり、翌年3月から12月の『談書会集帖』第61号から第65号には「六朝写経断片 大谷家蔵」「六朝写経断片 続前集」が、そして1920年2月の第66号に「西晋記正法蓮華経 大谷家蔵」「前凉西域長史李柏書稿 同上」等が写真入りで載っている。いわゆる李柏文書については（松田）南冥（1860～1929）の録文と解説があり、この号や後の号には、大谷家蔵と日下部蔵、時には大口蔵の、中国新疆の写経・古文書、中国の墓誌拓本・拓帖、日本写本等々が掲載されている。

『西域考古図譜』刊行の少し後、1910年代の後半に、このような新疆の經典・文書・墓誌、中国内地の碑文拓本という史料への関心の喚起が、日下部鳴鶴に極めて近い書学の世界で現れていて、それは日下部による扉の隸書、という推定と全く矛盾しない。

おわりに

1880年代後半に東京で書を学んだ大谷光瑞の師、それが日下部鳴鶴だったことと、その日下部は1880年代前半に、来日した楊守敬から少な

らぬものを学び、日本における書学と中国金石学の進展に関わっていたこと、これらの跡付けをまず試みた。そして、20世紀初頭の大谷探検隊と中国旅行で得られた紙本の經典・文書、さらに木簡、加えて碑誌までも含めた大谷光瑞の視野の広さのうち、特に金石史料方面は、少年時代に日下部に師事したことが影響していると推定したのである。38歳の年齢差がある2人の間には、それぞれの関係文士が介在して見えにくいながら接点を作っていたはずである。

大谷探検隊の活動が終わった1914年は、大谷光瑞が門主を辞した年でもあり、翌年に主要収集品をまとめ『西域考古図譜』として刊行される際には、隸書20字の扉が用意された。この筆を執った人物への指摘がなかったところ、その字姿と、日下部がその4年前に残していた字姿や補足材料との対照から、扉の隸書を日下部のものと推定した。日下部の回顧を含む複数の書物のうち、1880年代前半に関して詳細なものだけでなく、1900年代から1910年代前半にかかる大谷探検隊、さらにはスタインの探検、それらの入手史料に言及し、シャヴァンヌや羅振玉の書物も把握した記述があるものもあった。これに加え、日下部が深く関与した1910年代後半以後の談書会の会誌において、大谷探検隊収集・大谷家蔵の墓誌・写経・文書が多数掲載され、また日下部蔵の墓誌拓本・拓帖も同時に掲載されていたのである。これは、30年を経て、師だった日下部鳴鶴と、かつての弟子だった大谷光瑞との間に、見えにくいとはいえ深く良好な関係が継続していて、先の扉の隸書に関する推定に支障を与えない。

小稿の題は誇大広告的であるが、残されている記録には限界があった。このような視点と行論でなければ、日本における中国の、特に北朝隋唐時代を中心として、新疆・モンゴル地域も含めた東洋史の研究に関わる諸方面の文字史料の把握やその発展、それを取り巻く関係人士、これらについて議論が深まらないと考えた。

(32) 中西慶爾『日下部鳴鶴伝』60～61頁参照。

謝辞

小稿執筆の背景には、2003 年開館時の『横浜ユーラシア文化館』図録に「横浜ユーラシア文化館所蔵の中国拓本・古地図資料について」を執筆し、また 2014 年の『大陸調査の先駆 大谷探検隊』冊子において監修・執筆したという経緯がありました。これらの機会を与えられた館と関係者に感謝します。

さらに、隅田川神社の吟香岸田翁碑の撮影画像の掲載に関しては、許可に至るまでの事務的手続きがありました。この間の配慮と労を惜しまれなかった隅田川神社と関係者に感謝します。

う表があり、発起人の筆頭に「下山順一郎」と見える。上記縮小印刷物情報では「下村順一郎」とあるが、この年月でこの人名は見当たらず、正しくは「下山」とすれば、その関係が判明する。同頁には碑文の録文と読み下しもあり、極めて有益である。

付記

隅田川神社に小稿を事前に見ていただいたところ、貴重な情報を含む図録の送付を受けた。重ねて感謝し、以下に図録による判明諸点を略記する。

- (1) 豊田市郷土資料館編『特別展 明治の傑人 岸田吟香』（豊田市教育委員会、2013 年）。177 頁に個人蔵とされる「碑文拓本」写真があり、「約 1/3 の大きさに縮小」という、初期の欠落のない鮮明なものである。178 頁に、碑の除幕式の際に関係者に配られた「『記念帖』明治 45 年 3 月」も見え、碑文拓本写真の収録も確認される。一方、東京大学明治新聞雑誌文庫のサイト「明探」では、「吟香岸田翁碑」という 110 × 55cm の「拓本か」という 1 枚ものがある (<http://www.meitan.j.u-tokyo.ac.jp/detail/14983>)。サイズから原拓ではないので確認を見送っていたが、出版社〔下村順一郎〕、出版年備考〔明治 45.4(1912)〕ともあり、図録 176 頁の碑に関する『讀賣新聞』記事の年月に一致し上記配付物の年月の翌月でもある。これらのことから、原拓の精巧な写真撮影は確実に、配付物掲載の他に縮小印刷物もあったと確認できる。
- (2) 墨田区教育委員会編『隅田川神社の文化財 矢掛弓雄の世界 I』（同委員会、2017 年）。23 頁に碑の裏面鐫刻を示した建碑者 117 人名前一覧とい

Early Chinese Epigraphy and Palaeography in Japan and “Seiki Koko Zufu (Illustrated Archaeology of Central Asia)”

Akio Katayama*

Around the end of the Qing dynasty in China, Chinese and non-Chinese scriptures, documents, and wooden tablets excavated in Xinjiang (Western Region), and similar materials discovered in Dunhuang had been well known. Even before that, there were public and private stone inscriptions, their rubbings and texts, and epigraphical materials such as excavated epitaphs, and studies on those materials.

It was the three Otani expeditions lead by Kozui Otani (1876-1948) of Nishi Hongwanji between 1902 and 1914 that obtained various relics and historical materials in Xinjiang and brought back them to Japan.

During these expeditions, Kozui Otani has excavated inscriptions in the Beijing and Xi'an areas in China, and has also obtained rubbings. The Atlas of “Illustrated Archaeology of Central Asia” (1915) includes Buddhist artifacts such as Xinjiang mural paintings and Indian collections, but there are also historical documents and inscriptions obtained and partly once exhibited.

It is difficult to assume that the Otani's interest in these materials was influenced by the scholars of Buddhist history and Chinese history. The name of Meikaku Kusakabe (1838-1922), one of the “Three Great Calligraphers of the Meiji era”, was pointed out only once as a teacher of Kozui Otani during his childhood in Tokyo. Kusakabe, together with Sekka Matsuda and Ichiroku Iwaya, interacted closely with the well-learned Chinese scholar Yang Shoujing (1839-1915), who stayed in Japan, studied and discussed on the epigraphical rubbings brought with Yang himself. It is considered that the study and discussion in this period affected Otani through Kusakabe.

The writer of the 20 characters of clerical scripts as seen in the inside cover page of the above-mentioned “Illustrated Archaeology of Central Asia” (book title and other informations) has never been pointed out. But comparing those scripts with Kusakabe's clerical scripts in the “Honoring Inscription of Ginko Kishida” and “Corpus of Meikaku [Kusakabe]'s clerical scripts”, it is thought that those were written by Kusakabe. We can see the fact that Kusakabe mentioned the name of Kozui Otani in another book.

*Tokai University

横浜ユーラシア文化館紀要 第10号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 10

2022年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

印刷製本 アンクベル・ジャパン株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by ANQBELL JAPAN CO., LTD.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2021

ISSN 2187-7734